

シャクトリムシ類(ヨモギエダシャク)の生態と防除

かんきつを加害するシャクトリムシ類の中で最も発生が多いヨモギエダシャクの生態と登録薬剤の防除効果について調査したので紹介する。

～生態～

ヨモギエダシャクは、蛹で越冬し、成虫は年3～4回、5～9月の間に発生する。幼虫は6～10月の間にみられ、かんきつ以外にもクリ、モモなどの落葉樹や大豆などのマメ科植物の他、イヌマキ等の防風樹や雑草にも寄生する極めて広食性の害虫である。若齢幼虫は新梢を好むが、老齢幼虫になると体長60mm程度となり、被害が急増し、硬化した葉も食害することから、枝の葉がまるごと食い尽くされることもある。また、かんきつでは、果実も食害することがある。



かんきつを加害するヨモギエダシャク
幼虫(左)と成虫(右)

～防除効果～

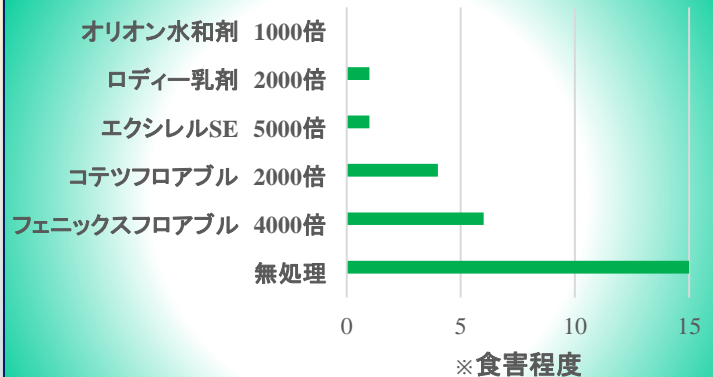
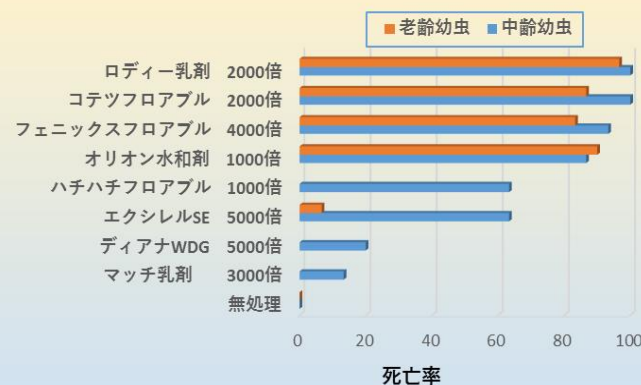
かんきつ類のシャクトリムシ類・ヨモギエダシャクに登録のある薬剤で、サワーオレンジを用いて放虫後各種薬剤を散布し、直接殺虫効果を調査した。

◎中齢・老齢幼虫に効果の高い薬剤

・ロディー乳剤 2,000倍 ・フェニックスフロアブル4,000倍
・コテツフロアブル 2,000倍 ・オリオン水和剤40 1,000倍

◎食害防止効果の高い薬剤

・オリオン水和剤40 1,000倍
・ロディー乳剤 2,000倍
・エクシレルSE 5,000倍



防除法

- 園周辺の雑木やイヌマキ等の防風樹を刈り込む。
- 本種は齢期が進むと防除効果が低下し、食害量も多くなるので、体長が20ミリ以下の若齢期に防除を行う。
- 薬剤防除は、ロディー乳剤2,000倍、コテツフロアブル2,000倍、オリオン水和剤1,000倍などで行う。

図1 ヨモギエダシャク中齢・老齢幼虫に対する薬剤の防除効果

※中齢幼虫は処理3日後、老齢幼虫は4日後に調査

図2 ヨモギエダシャク老齢幼虫に対する薬剤の食害程度

※処理4日後に食害程度を、無処理区の食害を5、食害なしを0として、程度別に算出し、3連制の和とした。